

プロレス文化史研究序説 -日本プロレス史の物語論的解釈の一試論-

Introduction to Study on the Cultural History of Professional Wrestling : An Attempt at
Narrativizing the History of Japanese Professional Wrestling

梅津 顕一郎

本論考は、サブカルチャーとしてのプロレスと、社会の物語の構図の変遷に関する、一試論である。大衆文化としてスタートした我が国のプロレスは、1980年代以降サブカルチャーの一分野としての側面を強くしていく。その時代史的背景を探るための基本作業として、本稿では見田宗介、大澤真幸による戦後メンタリティ史の社会学的議論に対照させることで、プロレスの時代史的な変遷を整理した。

今回の作業はあくまで思考実験的性格の強いものではあるが、特にプロレス興行のスタート時と見田のいう「理想の時代」のはじまり（1950年代前半）との一致、力道山の後継者としてのジャイアント馬場の全盛期と、見田のいう「夢の時代」（1960年代）との重なり、猪木新日本、馬場全日本の激しい興行戦争からプロレスのサブカルチャー化、さらには他団体化へと向かう1970年代から90年代後半までの期間と、見田・大澤のいう「虚構の時代」との符合を確認することで、プロレスがサブカルチャー化していく時代史的背景とその意味を考える枠組みを提示できたと考える。

またこうした整理作業を通じて、70年代の猪木新日本 VS 馬場全日本の興行戦争のなかで新日本プロレスが仕掛けた対全日本差異化戦略が、後のプロレス文化のシミュラークル化に連なるだけでなく、当時のファンにとって1960年代末用の若者世代による世界的な「異議申し立て」のやり直しの側面を持っていた可能性を示している。

キーワード：理想の時代、暖かい夢の時代、熱い夢の時代、虚構の自立、シミュラークル

目次

- I はじめに
- II 見田・大澤による戦後メンタリティ史の分析
- III 日本プロレス史の再整理
- IV 1964年のジャイアント馬場、1976年のアントニオ猪木
- V まとめにかえて

I はじめに

本稿は、サブカルチャーと社会の物語の構図に関する、一試論である。1950年代に本格的興行がスタートする「プロレス」は、1990年代まで極めて高い大衆人気を誇る娯楽文化であった。特筆すべきは、1950～1960年代の大衆人気に陰りの見えた1970年代を経て、1980年代初めには金曜夜8時からレギュラー放送の1時間枠の中で、幾度となく視聴率20パーセントを越えるなど、再びテレビの優良コンテンツの地位に復帰したことである。しかしそんなプロレス人気も90年代を最後に陰りを見せはじめ、今日ではもはや対世間的なインパクトを大幅に低下させている。かつてほぼ同等の人気スポーツであったプロ野球、大相撲などと比べるとずいぶんと後塵を拝しているのが実情である。

ところでプロレスがテレビコンテンツとして人気を博していた最後の時代、1980年代の後半から1990年代にかけての状況を顧みると、それは大衆文化というよりも、若い世代を中心とした「サブカルチャー」に近いものであった。そして、そのことは当時の日本社会における、社会的な物語を巡る、独特の状況と無縁のことではないと筆者は考えている。

この観点から筆者は、かつてプロレスと1980年代、とりわけ当時のサブカルチャー、メディアカルチャーとの関連について、考察を行った⁽¹⁾。一連の作業を通じて筆者が得た見解は、当時のプロレスが「虚実皮膜」あるいは「底丸見えの底なし沼」などと表現されたように、記号表現、あるいは虚構としてのリング上のパフォーマンスが、通常の社会的・文化的文脈から離れ、自立し独り歩きしたこと(=虚構の自立)、そのことが当時のシミュラークル化する消費文化にとって極めて親和的であったことなどである。

プロレスは純粋な表現行為である。形式上競技スポーツの形態をとり、ルールに則った技の応酬を通じ勝敗を決めていくが、それらのプロセスはすべて「競い合い」ではなく「表現」に本質を置いている。つまり、「競技スポーツとしての試合」という表層の姿は虚構であるといえるのだが、80年代ごろからプロレスファンはそうしたプロレスの虚構性を認識し、冷めたまなざしを向けつつも、実態のある競技スポーツ同様に熱中し、本気で楽しむという2重のスタンス(大澤真幸が言うところの、「アイロニカルな没入」)をとるようになった。

しかしその一方で、この時代、プロレスという「虚構」は、必ずしもありとあらゆる方向に向けて「自由に」楽しまれていたわけでもない。コアなファン層特有の「楽しみ方」が存在していたのである。とりわけ業界の「裏事情」を邪推する野次馬的スタンスが重要視される反面、純粋な表現行為に対する客観的で普遍的な評価軸の構築を目指す議論や、そのための舞台裏事情も含めた客観的検討(所謂「shoot 活字」)、業界関係者による、類似する建設的な方向性を前提とした暴露本(ミスター高橋による一連の著作)などは、コアなファンからは忌み嫌われていた。つまり、当時のファンの多くは、リング上の試合パフォーマンス=「虚構」を成り立たせる表現行為を「情熱」に分解し、事実在即し

て分析的に見るような視点を指すのではなく、あくまでプロレスパフォーマンスを嘘か誠か不明なギリギリの境界線付近に位置づけて、妄想と事実関係の境界線の設定と解体、再設定を繰り返しながらリング上のパフォーマンスに熱中したのである。

筆者は、このような、いささかスノッ的な視点が1980年代以降ある時期までファンの中心的なものとなっていた背景について、長らく80年代の新人類文化やオタク系文化の一部としてプロレスを位置付けることで説明が可能であると考えてきた。しかし虚構の裏側に潜む「業界事情」へのファンの指向性は説明がつくものの、なぜそれが「邪推」によるアプローチ、あるいは妄想的熱狂でなければならないのか、言い換えれば「事実」に到達するものであってはならないのかについては、なおも検討を要するものと考えられる。

こうした課題に対して、本稿では一つの思考実験として、見田宗介、大澤真幸が行った戦後日本におけるメンタリティ史に関する社会学的研究を手掛かりとしながら、80年代におけるプロレスのシミュラクル化とも言うべき状況に至るまでの流れを再整理することで、その背景と、その文脈を検討していく。

以下では、特に実質上のプロレス興行のスタート時が見田のいう「理想の時代」のはじまり（1950年代前半）と一致すること、大澤のいう「虚構の時代」（1970年-95年）が、まさにプロレスがサブカルチャーの一端となっていく過渡期及び、隆盛期、爛熟期と符合する点に注目し、見田-大澤による時代区分にプロレス史を照合しながら整理を行ったうえで、特に1960年代末用から70年代末葉迄のプロレス史についての仮説的な検討を加えていきたい。

Ⅱ 見田-大澤による戦後日本のメンタリティ史分析

(1) 見田宗介による「理想の時代」、「夢の時代」、「虚構の時代」

議論をプロレス史の物語論的位置づけに向ける前に、分析の手掛かりとなる見田宗介と大澤真幸による戦後日本のメンタリティ史の議論について概観しておこう。

まず留意したいのは、本稿における以下の展開で、見田、大澤の議論との関連から筆者が用いる「物語」の概念とは、例えば近代社会という大きなスパンに対する「科学哲学」や「理性への信頼」のような、メタ物語の体系の最上位に位置するグランド・ナラティブ⁽²⁾を指すのではなく、より時代拘束的でエリア限定的な、「価値観の体系」、「社会の目標」、あるいは「多数派のメンタリティ」を指しているという点である。

よく知られているように、見田宗介は戦後日本のメンタリティの変遷について、「現実」という概念に対置される概念の変遷から、「理想の時代」（1950年代）、「夢の時代」（1960年代から70年代初頭）、「虚構の時代」（70年代中盤以降）に分類している⁽³⁾。

戦後から「日米安保条約」締結（1960年）以前の時期、言うなれば「高度経済成長前夜」とも呼べ

る時期において、「アメリカン・デモクラシー」、「ソビエト・コミュニズム」といった政治的イデオロギーが、社会をより良い状況へと導くものとして人々に信頼されていた。この時代を見田は「理想の時代」と呼んでいる。

見田によれば、このような政治理念の位置づけは、1960年以降困難なものとなっていく。日米安全保障条約締結の際の国民全体を巻き込んだ大論争と混乱は、社会を動かし秩序付けるのが「政治的理想」ではなく、その向こう側にある国家間の対立関係、同盟関係などの「現実」であることに人々を気づかせることとなった。その意味で、「理想」に現実をより良い方向へと導く機能を託す考え方自体が信頼を失ってしまったのである(4)。

しかし見田によれば、そのような「理想」への信頼が揺らぎつつも、経済発展などが社会生活をより良きものへと導くことは実感されていた。右肩上がりの経済状況や、日進月歩の科学技術の進化の中、人々は日々の暮らしや未来社会に「夢」を見続けることができた。この状況は1960年代全般から70年代の途中まで続くこととなるが、この時代を見田は「夢の時代」と呼んでいる。後述するように夢の時代はさらに人々が安定した発展の下で幸福感を増していく、前半の「暖かい夢」の時代と、世界的にラディカリズムの吹き荒れる状況の下でより高次での変革が求められる後半の「熱い夢」の時代とに分かれる(5)。

最後に1973年秋の第四次中東戦争にはじまる世界的な経済不況によって、人々は社会生活に抱いていた「夢」すらも失っていく。この1970年代中盤以降から現代にいたる時代を見田は「虚構の時代」とした。虚構の時代とは、現実と対置される概念が、もはや現実をより良い状況へと導く機能を持たなくなる状況を指している。それはあくまでも透明で虚無感に満ち溢れた「虚構」なのである(6)。

(2) 大澤真幸による「夢の時代」の編入と「不可能性の時代」

これに対して見田の弟子である大澤真幸は、見田による「夢の時代」を前半の「理想としての夢」、後半の「虚構としての夢」の時代とに分け、その分水嶺を1970年とすることで、それぞれを「理想の時代」と「虚構の時代」に編入している(7)。

大澤は、人々の行為を価値づける審級となる他者のまなざし(=第三者の審級)のあり様とその超越性を重視する。政治的理想にせよ、人々の社会生活上の夢にせよ、「アメリカ」が第三者の審級として高い超越性を有していた時代を「理想の時代」、そのような超越性をアメリカ的な理想が失っていく時代を「虚構の時代」としたのである。

大澤によれば、1970年以降、超越性を失った「アメリカ」にとってかわり、徐々に人々の価値の審級となっていくものは、主としてサブカルチャー領域において捏造された「虚構の物語」だった。しかし「虚構の物語」は、厳密にはその物語的内容自体が、現実を生きる人々の価値の審級となるのではない。大澤が重視するのは「虚構の自立」、すなわち「虚構」を「現実」の上位(つまり超越的な位置)に置くのではなく、現実から切り離し「虚構」のまま自立したものとしてとらえ、それ

と戯れるという人々の指向性である。その意味で、「虚構」は「現実」と対等であり、また「現実」と対置される。従ってこのような図式の下で「虚構」が発揮する超越性は、「理想」ほどのものではなく、それは「超越的他者」と「内在的他者」の距離の近さとなって表れる⁽⁸⁾。

この観点から大澤は、「虚構の時代」の終焉時期を1995年とする。この年、3月の地下鉄サリン事件から一気に日本中を巻き込んだ騒ぎとなる一連の「オウム真理教事件」は、「虚構の物語」への人々の信頼を著しく消失させる出来事であった。同事件がとどめとなる形で「虚構の物語」への信頼を失った人々、特に若い世代は物語的思考自体を必要としなくなる。こうして、疑似的なものも含め、価値的審級を失った時代を大澤は「不可能性の時代」と呼んでいる⁽⁹⁾。

(3) 見田、大澤による分類の同じと違い

以上概観してきた見田、大澤による時代誌区分の議論については、それぞれ微妙に重なる視点と異なる視点を含んでおり、そのことがそれぞれの概念的有用性と課題の要因になっていると考えられる。

例えば見田の議論は、社会意識の表層に結果として顕在化した社会の価値観のあり様を丁寧に説明するには便利であるが、第三者の審級と社会的物語のあり様に本質的なものを設定し、それが成立する背景にまで踏み込んで議論する大澤においてこそ⁽¹⁰⁾、「不可能性の時代」という概念の提示も可能となる。

次章ではこのような両者の違いを踏まえ、原則的には見田の区分に立脚しつつも大澤の提示する第三者の審級の在り方の議論を重視し、特に時代の象徴としてのスターレスラーをめぐる物語性の変遷について1950年代の黎明期から、サブカルチャーとしての人気の頂点を極め、その後衰退し始める1998年ごろまでのプロレス史の流れを位置付けていきたい。

Ⅲ 日本プロレス史の再整理

(1) プロレスをめぐる「理想の時代」「夢の時代」「虚構の時代」そして「不可能性の時代」

前述した「理想の時代」「夢の時代」「虚構の時代」「不可能性の時代」をプロレス史に照合すると、次のような区分けが出来上がる。

①力道山エース時代（1953-1963年）：「理想の時代」、②馬場エース時代（1964-1971年。途中から国際プロレスとの2団体時代）：「夢の時代」、③3団体時代（1972-1998年。実質的には全日・新日2団体拮抗時代）から新日主導によるプロレスプロレスブームと業界全体の活性化を経て他団体乱立時代へ：「虚構の時代」、④さらなる他団体乱立時代とプロレス人気の退潮（1999年-現在）：「不可能性の時代」以下では暫定的にこの区分を採用しながら、1998年ごろまでの状況の変遷について

概観してみよう。

(2) 力道山エース時代のプロレスと「理想の時代」(1953-1963年)

よく知られているように、日本プロレス界の父とも呼ばれ、プロレス業界の本格立ち上げと発展に貢献した力道山光浩がプロレスデビューを果たしたのは、1951年のことだった。その後渡米した力道山は、海外修行ののち、1953年に自らが主宰するプロレス団体「日本プロレス」を旗揚げする。

1953年は、NHKのテレビ放送と、初の民間テレビ放送局である日本テレビが開局された年であり、プロレスはテレビ時代黎明期の優秀コンテンツとなっていく。特に当時都市部で流行した街頭テレビにあっては、小さなブラウン管テレビを離れたところから群衆として視聴するスタイルに適合的なコンテンツは、一対一で選手が対峙する絵柄を基本とするものに駆らざるを得ず、その意味で相撲やボクシング同様プロレスは優秀なテレビコンテンツであった。

多くのプロレス研究者たちが指摘しているように、力道山プロレスの人気は、そうした見易さに加え、物語のわかりやすさ、爽快感によるところも大きかった。特にプロレスの大衆人気が高かったのは、1953-55年ごろである。当時の理想的アスリートの大きさに近い体格でオーソドックスな試合運びの日本陣営(11)に対して、外国陣営のレスラーは大男や凶暴なキャラが多く、凶暴レスラーの反則攻撃も辞さない攻撃や、大男の力任せの攻撃に追い詰められながらも、耐え抜いて逆襲し、日本陣営が勝利を収めるというのが、初期力道山プロレスの典型的なパターンだった。この時点ではアメリカを中心とする外国陣営は明らかに悪役であり、その悪役を正義の力道山がためにためたエネルギーを爆発させるかのような逆転攻撃で撃退するという単純明快な物語に、カタルシスを感じる人は多かったと思われる。しかし、プロレス人気は低下する1950年代中ごろ以降、このように露骨な単純図式を前面に押し出す風景は影をひそめ、体重別選手権の開催(55年12月)や「世界チャンピオン」ルー・テーズの招聘(57年)にみるスポーツとしての権威化、日米タッグチームの結成などの試みを経て、第1回ワールドリーグ戦開催(58年)へと至る流れから、プロレスの「物語」はより多様なものへとなっていった。

さて、このような力道山率いる初期のプロレスの展開を改めて見田・大澤の「理想の時代」と対応させてみると、それが時には正転、時には反転する形で時代状況に対応しているという図式が、仮説的に浮かび上がる。力道山のプロレスは、「アメリカ」をその物語の中に、常に内包するものであったと言える。すなわち、当時は戦後の近代のやり直しの中で、人々がアメリカン・デモクラシーの「理想」のもとで、より良い社会を目指すことの正当性を信頼していた時代ではあるが、大澤の超越的他者の天皇からアメリカ(マッカーサー)への交代劇に対する見解を参照すると、当の日本人はそうした「正当な」理想を提供するアメリカに対してはある種のコンプレックスを抱いていた可能性は十分にうかがい知ることができる。そして、そのコンプレックスを晴らす戦いが、まさにプロレス黎明期(1953-55年頃)における力道山対アメリカ人レスラーであった。また、このような単純図式がリング上から姿を消した50年代後半以降も、「私生活者」「実業化」としての力道山という「キャ

ラクター」は、常に“アメリカ”への憧憬を人々に感じさせるものであった(12)。

(2) 「エース・ジャイアント馬場」の登場と「夢の時代」(1964-1971)

しかし力道山は1963年、39歳の若さで死去する。その後豊登の短期政権を経て、1964年の後半からはジャイアント馬場がエースの時代へと突入する。馬場は同年4月にアメリカ修行より帰国するが、アメリカ修行中はフレッドアトキンスの下でかなり厳しいトレーニングを積んだとされており、このときは晩年の姿からは想像できないほどの、ある程度筋肉のついた分厚い上半身と、当時脚力世界一ともいわれた下半身とのバランスの取れた、比較的レスラー体型に近い肉体を獲得していた。また巨体に似合わぬバネのきいた俊敏な動き等もあり、力道山にはないダイナミックさとスケール感が魅力のレスラーとされていた(13)。

一方馬場の帰国直後は2枚看板扱いされたものの、その後まもなくエースの座を追われた豊登は、1966年、アントニオ猪木らを引き抜き「東京プロレス」を立ち上げる。しかし東京プロレスは、テレビ放送もつかず、早々に人気頭打ちとなり約1年で破綻してしまう。また同年10月には吉原功氏率いる「国際プロレス」が誕生し、TBSが放映するが、日本プロレスほどの人気はなく、後塵を拝することとなる(1981年9月まで)。

東京プロレスの崩壊後日本プロレスに復帰したアントニオ猪木は、馬場に次ぐ準エース扱いとなる。特に馬場・猪木のタッグチームは、日本プロレスの看板となりBI砲と呼ばれるようになっていく。猪木も馬場ほどではないにせよ、当時の日本人アスリートとしてはかなり大柄で(14)、何より体つきが若いころのルー・テーズそっくりだと言われるほど、本格的なレスラー体型とされ、くり出す技も当時としては多彩であった。さらには馬場、猪木の中間的な体格の柔道チャンピオン坂口征二も入団し、1960年代後半期には外国人よりも大きくたくましい日本人レスラーが、そのスケール感あふれる試合で相手を圧倒するという物語が、馬場を中心に形成されていったと考えられよう。

この時代は見田の区分では夢の時代に相当する。高度経済成長が加速化する1960年代において、日本は驚異的な経済成長を見せるのだが、やがては大きなアメリカをより大きな力で制覇する夢を抱いた者もいたのではないか。特にBI砲の全盛期にあたる1968年は、日本のGNPがアメリカに次ぐ世界第二位に躍進した年である。体格においてアメリカ人レスラーを凌駕し、もとプロ野球選手としてアスリート能力においても一流のものを持つG馬場が繰り出すダイナミックな技の数々、ジャーマンスープレックスなど当時まだあまり使い手のいなかった高度なテクニックを決める本格ファイター猪木の試合運び、坂口征二の荒っぽい力強いファイトスタイルは、こうした「力においてアメリカを凌駕する」夢を体現するものであったに違いない。

(3) 「虚構の時代」におけるプロレス①3団体時代：実質的には全日・新日2団体拮抗時代(1972-1980)

①虚構の時代に関する時代区分について

前述のように、大澤真幸の議論に従うのであれば、「虚構の時代」は1970年から1995年迄の25年間ということになる。これをプロレス史に当てはめるなら、前年のアントニオ猪木の追放劇に端を発し団体分裂へと向かう1972年から、猪木引退の1998年あたりまでが相当すると考えられる（場合によっては翌1999年1月のジャイアント馬場死去までを含めてもよいかもしれない）。

大澤の時代区分よりも2年遅い1972年をプロレス界での「虚構の時代」の始まりとするのは、次のような理由がある。以下に見るように、1970年代に於けるアントニオ猪木の「新日本プロレス」（以下、「新日」と略記）が、馬場の「全日本プロレス」（以下、「全日」と略記）に対する差異化戦略、あるいは世間一般への話題作りを狙って仕掛けていった数々の企画は、結果として馬場全日本のオーソドックスなプロレスを、時代遅れの古いものとして位置づけることとなった。このことは夢の時代=60年代のプロレスの中心にいたジャイアント馬場が、陳腐なものとなっていくことにほかならず、夢の時代の終焉を意味している。その流れが始まるのが1972年なのである。

一方、25年を超える長い年月は、一つの時代区分でくくるには長すぎるであろう。特にプロレス業界は、80年代以降団体再編など激動の時代を迎えており、それらの変化も追いつながらより慎重に時代の推移を整理する必要がある。そこでこの時代を暫定的に前半の10年（1972-80年。猪木新日がさまざまな仕掛けにより馬場全日を凌議するトップ団体となっていく過程の時代）、中盤の9年（81-89年。猪木新日のリードによる、プロレスブーム以降サブカルチャーとしての性格を見せるようになったプロレスが、中盤の業界全体をも巻き込む活況ののちに他団体化へと向かう時代）、終盤の9年（90-98年。業界外資本の参入失敗から業界全体が内側に向かう時代。かつ、馬場、猪木の影響力が、業界内に対して効果を持っていた最後の時代）に分けて捉えている。以下では特に本稿の課題に係る前半の10年間について概観しよう。

②猪木日本プロレス除名と新日本プロレス旗揚げ

日本プロレスが準エース格の人気レスラーアントニオ猪木の除名、追放を発表したのは1971年12月のことであった。理由は猪木が会社乗っ取りのクーデターを画策したことと発表され、企ては未遂に終わったが、騒動の責任を取らせる形で猪木を追放するとされていた。

しかしこの事件が単なる一レスラーの企て失敗などというものではなかったことは、その後の展開からも明らかである。翌72年早々に猪木追放劇の玉突き効果から、テレビ中継の老舗放送局・日本テレビと日本プロレスとの間に契約上のトラブルが発生する。このことは、結果的にエースの馬場が日本テレビの放映権とNWA所属のレスラー招聘ルートを持ち出す形で独立し、自身の団体「全日本プロレス」を旗揚げする事態にまで発展する（7月）。さらにもう一人の準エースであった坂口征二も73年には子飼レスラーを伴い、NETテレビ（現・テレビ朝日）のテレビ放映権ごと猪木の新日本に合流する。こうした一連の流れは、確かに当時の日本プロレスの経営、運営面の杜撰さと、経営サイドと選手たち、あるいは選手同士の関係の悪さを物語っていると言っている。結局日本ブ

ロレスは消滅し、60年代から経営を続けていた国際プロレスも含めた3団体時代が到来する。

③全日 VS 新日興行戦争における新日の対全日差異化戦略

3団体時代と言っても、その実は、日本プロレスの遺産を引き継ぐ馬場の全日と、新興勢力猪木新日の興行戦争であったとみてよいだろう。馬場全日よりも先の旗揚げとなった猪木新日ではあったが、旗揚げ当初はテレビ放送もなく、日本プロレスの圧力もありアメリカのプロモーターの協力が得られず、主要ルートから外れ、アメリカでは影響力の弱かったカール・ゴッチにブッカーを依頼し、レスラーを招聘することとなった。その後坂口の移籍でようやくテレビ放映（NETテレビ）を獲得するが、外国人レスラー招聘ルートについては、日本プロレスに代わってアメリカ最大の興行組織・NWAを抑えた馬場全日が圧倒的に有利な状況が続いた。

スターレスラーの招聘に後れを取った新日は、様々な形で世間の話題となるような仕掛けを実践していく。まずは1973年11月、当時猪木との抗争劇で人気が出てきたインド出身の悪役レスラー・タイガー・ジェット・シンを売り出すために、新宿伊勢丹前で当時の猪木夫妻を路上襲撃させ、警察沙汰となった。また翌74年には、国際プロレスを離脱したエース・ストロング小林的挑戦を受け、2度にわたる直接対決を敢行する。これは「昭和の巖流島決戦」と呼ばれ、1954年に行われた力道山対木村政彦戦以降、外国人レスラー対日本人レスラーという構図が基本的には定式化していた風景を変える出来事であり、そのような形での対決を前面に出すことは、安定した経営の馬場全日に対する、ある種の差異化戦略ともなった⁽¹⁵⁾。

さらに1976年からは一連の異種格闘技戦を開始する。第1弾は76年2月のウィレム・ルスカ⁽¹⁶⁾戦であり、最も世間の話題をさらったのは続く第2戦の対モハメッド・アリ戦である。詳しくは後述するが、試合は「世紀の凡戦」と揶揄される結果となったものの、アスリートとしても、社会的な存在としてもまぎれもないスーパースターだったモハメッド・アリと同じリングで試合した猪木は海外でも話題となり、このころからプロレスラーとして、馬場を超える人気を博するようになってくるのも事実である。

④北海学園大学プロレス研究会編『戦う男たち』に見る猪木ファンの馬場への目線

ここで、1970年代末葉から1980年代初頭にかけての時期に、ファンがプロレスをどのように語り、書いたかの一端を示す例として、当時北海道の私立大学の学生たちが発行していた『戦う男たち』という同人誌を紹介したい。当時、大学の文系サークルがアイドルや漫画などのサブカルチャーに傾倒する中、プロレスは格好の“ネタ”であった。同誌はそのような流れの中で発行されたものである。

同誌を一読してまず気づくのは、当時のマニアックなファンの持つ情報力の広さ、深さである。観戦記はもちろん、プロレス技の細部にわたる系譜の研究や、当時話題となっていた村松友視をはじめとする作家、文化人たちによるプロレス論への感想など、おびただしいほどの知識量によって支えられた記事が目立つ。発行されたのかネットの存在しない時代であったことを考えると、なおのことで

あるといえる。

しかし、それ以上に特徴として目立つ点は、当時のファンにおける馬場への「毛嫌い」ともいうべき冷徹で批判的な目線と、「狂信的」と言ってもいい猪木への熱狂的な傾倒ぶりである。特に自ら猪木ファンを名乗る書き手にこの傾向は強く、逆に全日本を評価する書き手においては猪木新日に批判的ではあっても、猪木の存在そのものを毛嫌ひするほどの激しさは感じられない。明らかにファンの目線は猪木に熱く、馬場に冷たい傾向を示していたのである。

前述のように当時新日本プロレスが斬新さと話題性で全日本プロレスをリードしていたとは言え、全日本プロレスのテレビ中継もあり、市場に出回るプロレス誌には国際も含めた3団体の記事、グラビアが掲載されていた当時の状況の中でのこの偏向ぶりは、いささか腑に落ちない現象である。何故、猪木支持者は、ここまで馬場全日を嫌悪したのであろうか。

答えを先取りしていえば、1970年代の中盤、世間全般の若者がしらけに向かう中、猪木新日の対馬場全日本差異化戦略は、当時まだ若者層においてある一定の勢力をなしていた「左派」的心性にも通じる、反体制的抵抗運動をイメージするものであったと筆者は考えている。当時の若者世代には、矛盾する大人社会への不満や批判的視点を抱えながらも、先輩世代のような抵抗運動に踏み切れない者も多く、そうした若者たちの悶々とした不満を晴らしてくれるのは、権威ある馬場ではなく、権威にあらがう猪木だったのである。

そしてそのことは虚構の時代前半にあたる70年代と、中、後半にあたる80年代以降とを分ける大きなポイントとなっていると筆者は考えているのだが、これについては70年代における猪木と馬場の役割をより詳しく検討し、70年代当時のプロレス界を取り巻く大きな物語を解読することでその理由を明確にできると考える。

IV 1964年のジャイアント馬場、1976年のアントニオ猪木

往年のプロレススターを扱った書籍は現在でも出版されている。21世紀以降比較的ファンの話題に上ったものに、柳澤健による二つの書籍『1964年のジャイアント馬場』（2019年双葉社）、『1976年のアントニオ猪木』（2009年文春文庫）がある。これまでの議論からも明らかなように、それぞれの表題になっている1964年、1976年はともに馬場、猪木が全盛期を迎えた年であり、それぞれの時代のプロレス業界及び社会を取り巻く物語が、馬場猪木両者のレスラーとしての性格を決定づけていると言って良い。

(1) 「暖かい夢+&」としての馬場

既にみたように、見田宗介は1960年代から70年代初めまでを「夢の時代」としたが、厳密には比較的安定した社会発展の下で人々の幸福感が高まる「暖かい夢」(17)の時代(1960年代前半)と、世

界的にラディカリズムの嵐が吹き荒れ、アメリカン・デモクラシーやソビエト・コミュニズムといった古い理想を標的に若い世代が反乱を起こす「熱い夢」の時代（1960年代後半-1970年代初頭）とに分けられる。

馬場が肉体的に全盛を迎え、役割的にもエースに君臨するようになる1964年は、見田の分類によれば比較的安定した社会発展の下で人々の幸福感が高まる「暖かい夢」の時代にあたる。無論この年からの数年間、少なくとも60年代末から70年代初頭まで、馬場はプロレス界の第一人者で居続ける。しかし、彼は「熱い夢の時代」の象徴とはならない。馬場のスケール感あふれるファイトスタイルは、新幹線や東名高速道路の開通、GNP世界第二位への躍進などに見る「日本の躍進」とは呼応しても、世界的な若者の異議申し立てには呼応しないのである。

むしろ猪木追放事件以降、日本プロレス崩壊に至るまでの時期に目についた、馬場の処世術の確かさや、海外プロモーターやテレビ局とのコネクションの強さ、あるいはその後の時代に全日本プロレスの経営者として見せる、力道山時代からの伝統的なシステムを手堅く継承するような姿勢は、「異議申し立て」される側、すなわち大人社会側が持つ保守性をイメージさせるものだったであろう。

(2) モハメッド・アリ戦に象徴される、「熱い夢」をリベンジする猪木

他方、猪木はどうであろうか。猪木は71年の除名処分以前にも、ワールドリーグ戦初優勝時における馬場への挑戦宣言（69年）など、たびたびファン受けの高い、ラディカルな発言をしていた。その猪木が自身の団体を旗揚げした直後から興行的苦戦に悩まされるさまは、ある程度ファンの判官びいきを呼び込む結果となっただろう。また、猪木除名事件の真相については未だ不明な点も多いが、乗っ取りではなく他の選手仲間たちと経営改革を目指したものだだったとの指摘は80年を迎える前には世に出ており、むしろ猪木のイメージを「裁かれる悪だくみの首謀者」というよりは「悲劇的改革者」としてとらえるファンも決して少なくはなかったのではないかな。

また70年代全般の対全日本差異化路線（日本人エースレスラー対決の演出と「プロレス市民権」あるいは「プロレス最強説」）は、単なる「他団体との差別化を通じた新日本プロレスの個性化」の範囲を超え、プロレス内における、ある種の「遅れてきた異議申し立て運動」のように見えたのではないだろうか。そして1976年6月に行われた異種格闘技第2戦の相手が、あのモハメッド・アリだったことが、「抵抗する猪木」のイメージを決定的にしたのではないかな。

周知のようにモハメッド・アリことカシアス・クレイはローマオリンピックのボクシング競技ライトヘビー級で金メダルを獲得したのちにプロ入りし、1964年にはWBA、WBCのヘビー級王座を統一する。しかしその後ベトナム戦争の徴兵を拒否し、保守派と対立する中、無敗のままタイトルを剥奪されるも、3年7か月のブランクを経て再び74年に世界チャンピオンに返り咲いている。他方で反戦運動や公民権運動へのかかわりも深く、マルコムXとの出会いからアメリカの黒人ムスリムに改宗した際に「モハメッド・アリ」に改名したことで知られている。

猪木が対戦を実現させた76年当時、もちろんアリはプロボクシングの現役チャンピオンであり、その意味ではプロレスをめぐる世間の冷たい視線への抵抗を示す対戦相手としてはうってつけであった。他方極めて強いラディカリズムの支持者であり、60年代の異議申し立ての象徴でもあるアリと同じリングに立つことは、猪木自身もまたそのようなラディカリズムに共感するものとしてイメージされるには充分だったのではないか。

試合は終始フットワークを使いながらぐるぐると円を描くようにリング上を移動しつづけるアリに対して、リング状にあおむけの体制をとる猪木が、寝た状態からのキック攻撃（通称アリキック）を仕掛けるという状況が続き、「世紀の凡戦」とも揶揄される結果に終わった。このようなことから、試合直後から世間には失望の声も広がっている。無論猪木新日が実際に60年代末用の世界的な「抵抗運動」にアリが関わっていたことを意識してこの試合をプロモートしていたかどうか不明である。

しかしこの試合をきっかけにアリとの間に交流⁽¹⁸⁾が育まれていくことや、後にはむしろ凡戦であったことが、逆に試合のリアリティの高さを象徴しているとの評価も出てくるようになったなどの事実は確認できる。

ただし重要な点は、これら全てについて、猪木新日が当初より意図的に仕掛け、狙って出した結果であるという根拠はどこにもないということである。プロレスというジャンルの大衆娯楽的性格を考えた時、そのような思想意図があったとは考えにくく、むしろファンの側が勝手に読み取ろうとした（あるいは妄想した）物語と呼応しながら、後々花ひらいていったとみたほうが自然である。その意味では、この時代、猪木新日の仕掛けを媒介に、ファン自身が「抵抗運動のリベンジ」という虚構の物語と戯れた、とみてもよいであろう。そして、ファンの側から見た虚構との戯れである以上、その行間から見える背景もまた、虚構を作り出す実情ではなく、あくまで虚構の一部でなければならない。1980年に村松友視が発表した『私、プロレスの味方です～金曜午後八時の論理』は、まさに「抵抗運動のリベンジ」と「虚構」、そしてプロレスとの絶妙な位置関係を言語化した文献であると言える。そのようなスタンスは、「抵抗」という物語が後退し、より広範囲の物語へと拡散していく80年代以降においても引き継がれたと考えられるのではないだろうか。

V. まとめにかえて

今回筆者が行ったプロレス史の分類は、あくまで思考実験的なものであり、得られた知見はあくまで仮説的なものの域を超えるものではない。そのような制限付きではあるが、今回の論考では、ある程度「虚構の時代」に関する考察を進めることができたと思う。長い「虚構の時代」にあって、前半の1970年代と80年代以降とは随分風景が異なる。これまで筆者が考察してきたように、80年代以降、プロレスのシミュラークル化、物語の多様化と細分化は進んでいくが、70年代にあっては、まだある種の物語は存在していた。異議申し立ての時代のほてり⁽¹⁹⁾が残る状況下での「抵抗の物語」

がそれである。少なくともプロレス文化においてはそのような状況である可能性は示せたのではないだろうか。そして冒頭で筆者が述べた疑問、つまり 80 年代に虚構の自立がはるかに進んだ状況の中で、何故真相究明ではなく、邪推が好まれるのかについての答えもここに内包されると考える。

最後に今後の展望を述べておきたい。筆者は本稿の執筆に先行して、80 年代以降のプロレス文化に関する論考を行っている。これらの作業に対して今回実験的に作成したプロレス史の時代区分の枠組みを導入することで、より詳細なプロレスサブカル論を構築できるのではないかと筆者は考えている。また、これらの思考実験で得られた知見をより確かなものとするために、今後はかつてのプロレスマニアへのインタビューや過去に発行されたプロレス雑誌、研究書籍等のテキスト分析なども行っていく予定である。

注釈

- (1) 梅津 2008、梅津 2010 および、梅津 2014 における議論を参照のこと。
- (2) 社会の大きな物語とその解体に関する議論については、J.F. リオタール 1978 を参照のこと。
- (3) 見田 2006、とりわけ PP. 70-95 を参照。
- (4) 見田 2006、同上を参照。
- (5) 見田 2006、同上を参照。
- (6) 見田 2006、同上を参照。
- (7) 大澤 2008, P. 1-3 を参照。
- (8) ちなみに大澤はこの分かりやすい例として、スター、あるいはアイドルと呼ばれる存在を挙げている。すなわち「理想の時代」における社会の理想を反映したスターは、一般ファンにとって高い空に輝く星のような存在だが、虚構の時代におけるアイドルは、偶像であってもしっかり身近な存在に降りてきたものとなるという。詳しくは大澤 2008 を参照。
- (9) 大澤 (2008) を参照。
- (10) 大澤のこうした議論の典型的な例として、「アメリカ」的なものがなぜ戦後日本人にとっての「理想」となりえたかに関する議論があげられよう。見田は政治的イデオロギーを理想として信頼するところに正当性のよりどころを見出しているが、その出発点にあたる戦後間もない時期を連想した場合、わずかに数か月前まで「皇国日本」を信じていた国

民が一気に「アメリカン・デモクラシー」の信奉者となるというのはいささか無理がある。しかし超越的他者の交代劇として昭和天皇とマッカーサーの階段を位置付けてみると、わかりやすい図式が見えてくる。

(11) 力道山の体格は、公称 180 センチ 116 キロ、ある時期までタッグパートナーを務めていた元柔道王の木村政彦が 170 センチ 85 キロとなっている。このうち力道山については、力士時代の伸長が 176 センチと発表されており、髻の分を差し引くと 175 センチ程度であったものと考えられている。栃錦、若乃花が 175-178 センチ程度、川上哲治が 174 センチであったことを考えると、力道山、木村共に当時のアスリートとしては平均的であるといえる。一方対戦相手の中でも特にこうした勲善懲悪のストーリーにはまった、シャープ兄弟は、兄ベンが 197 センチ、112 キロ、弟マイクが 199 センチ 119 キロとなっている。

(12) “キャラクター”としての「力道山」がアメリカ的な性格を持ったものであったことを示すエピソードとして、マス・メディア記者たちの前で、わざわざ好きでもないステーキをほおぼった、という逸話は有名である。また、レスラー後半期に見せた“実業家”としての顔を、明らかにアメリカ的な消費経済を意識したものであった。

(13) 馬場のアメリカ修行時代については、柳澤 2019、原 1997 等を参照。馬場と猪木、1964年のジャイアント馬場等を参照)

(14) 当時の猪木の体格は、公称 191 センチ 110 キロ。なお馬場の公称は 209 センチ 145 キロとなっているが、馬場、猪木とも力道山に合わせてやや大柄に申告していたという説もある。ただし仮にそれが事実で力道山同様 5 センチ程度伸長を水増ししていたとしても馬場は 204.5 センチ、猪木は 186.7 センチということになり、馬場は規格外の大きさ、猪木も身長的には当時大型横綱と言われた柏戸、大鵬クラスということになる。なお坂口征二の公称は 196 センチ 130 キロだが、アマチュア時代の数値とあまり変化はなく、ほぼ実際の体格を示していると思われる。

(15) 当時対決の実現に向けて、表向きは国際プロレスを離脱した小林が全日本の馬場、新日本の猪木に挑戦状を出し、黙殺した馬場に対して猪木は挑戦を受けるという形をとったが、実際には国際プロレスから新日本プロレスが小林を引き抜き入団させている。またこの時小林は馬場に対しても挑戦状を出しており黙殺されたことで、対決を引き受ける猪木、引き受けない馬場という形での差異化が起こっている。

(16) 1972年に開催されたミュンヘンオリンピックの柔道協議において、無差別級と重量級の2冠王に輝き、76年開催のモントリオールオリンピックでも活躍が期待されていた、当時の現役柔道選手（オランダ代表）。

(17) 「暖かい夢の時代」を分かりやすく説明する例について、見田は特に映画『ALWAYS 三丁目の夕日』に描かれる、人々の幸福感あふれる世界を挙げている。

(18) 二人の交流を示す具体的な例としては、アリが入場テーマとして使用していた「アリ・ボンパイエ」が猪木にブ

レゼントされ、入場テーマ曲「猪木ボンパイエ`炎のファイター」として使用されたことなどがあげられる。

(19) 小谷敏編 1993, PP. 2-5 を参照。

参考文献

- 入不二基義、香山リカ他 2023 『アントニオ猪木とは何だったのか』 集英社新書
- 梅津顕一郎 2008 「プロレスの肉体—日本のプロレスラーらしさとその解体をめぐる—」池井望編『体の社会学』世界思想社
- 2010 「プロレスと 80 年代—プロレスの今日的不幸を読む」『現代風俗 プロレス文化—歴史・表現・エロス・地域・周縁』現代風俗研究会編
- 2014 「プロレスの 1986 年—「対立軸」をめぐる虚構とリアルの交錯した時代」『宮崎公立大学開学 20 周年記念論文集』宮崎公立大学
- 岡井崇之編 2010 『レスルカルチャー—格闘技からのメディア論』風塵社
- 岡村正志 2008 『力道山～人生は体当たり、ぶつかっただけだ』ミネルヴァ書房
- 岡村正志・河村卓 1998 『超時代的プロレス闘論』三一書房
- 見田宗介 2006 『社会学入門』岩波新書
- 2018 『現代社会の理論—情報化・消費社会の現在と未来』岩波新書
- 大澤真幸 2008 『不可能性の時代』岩波新書
- 2009 『増補 虚構の時代の果て』ちくま学芸文庫
- 小谷敏編 1993 『若者論を読む』世界思想社
- 斎藤文彦 2022 『猪木と馬場』集英社新書
- 原 康史 1997 『激闘・馬場と猪木（第一巻）両雄、アメリカ修行時代』東京スポーツ新聞社
- ミスター高橋 2001 『流血の魔術 最強の演技—すべてのプロレスはショーである』
- 柳澤 健 2009 『完本 1976 年のアントニオ猪木』文春文庫
- 2019 『1964 年のジャイアント馬場』双葉書房
- Jean-François Lyotard, 1979 *La condition postmoderne*=1986 小林康夫訳『ポストモダンの条件—知・社会・言語ゲーム』風の薔薇

